

聖書: エステル記6章1～14節

説教: 王が栄誉を与える者

はじめに

ペルシャ帝国のクセルクセス王の側近であるハマンは、あるときモルデカイに対して個人的な恨みを抱き、国内に住むすべてのユダヤ人を根絶やしにするための法令を王の権威を使って発布しました。これを知ったモルデカイはエステルの所に行き、王に対してあわれみを乞い求めるようにと説得したところ、エステルは苦しみ抜いた末に「死ななければならないのでしたら死にます」と覚悟を決め、王のところに出向きます。王の召しがないのに勝手に王の部屋に入れば、殺されるかもしれないのですが、幸いにして王は快く迎えてくれたので、こうして第一関門は突破できました。当初エステルは、王とハマンを宴会に招待し、その席でユダヤ人を救って欲しいと願う計画でした。しかし問題が一つあった。王はハマンに絶大な信頼を置いています。そのハマンを告発しようというのですから、うかつなことは言えない。確実な証拠を示す必要がある。これが越えなければならない第二の関門でしたが、どうしても証拠がつかむことができないのです。結局エステルはその日は諦め、翌日もう一度宴会を開くことにし、その席でハマンを告発することにいたします。そのときまでに、決定的な証拠をつかむことができるようにと、ひたすら祈り続けるしかありません。神はこのエステルの祈りにどう応えられたのか。今日の所を見て参ります。

1 クセルクセス王

1) 記録の書、年代記を開く

1節。「その夜、王は眠れなかったので、記録の書、年代記を持って来るように命じた。そしてそれは王の前で読まれた。」

エステルが最初の宴会を設けた夜、なぜか王はなかなか寝つくことができません。そこで長い夜をやり過ごすために、記録の書、年代記をもってこさせる。王がなぜ寝つけなかったのか、なぜそのとき記録文書を読みたくなったのか。おそらく王にも説明ができないでしょう。ただ、王がこの時、年代記を読みたいと思ったことがきっかけになって、この後ハマンの悪事が暴露されていくのですから、ここに神の御手が働いていると考えるべきでしょう。

2) モルデカイに栄誉を与えていなかった

分厚い王の年代記の中から王の前で読まれたのは、二人の宦官が企てた王の暗殺計画をモルデカイが事前に見つけ、王に報告したという箇所でした。この暗殺計画については、後で詳しく振り返りますが、ここで考えたいのは、モルデカイが王のいのちを救うような大きな手柄を立てたのにも関わらず、なんの栄誉も与えていなかったという事実です。そのことを知った王は、「すぐにでもモルデカイを呼び、きちんと栄誉を与えなければ」とあわてるほど、栄誉を与えることは大切なことだったのです。日本の戦国時代もそうだったようですが、手柄を立てた武将にはきちんと褒美を与える。そうやって部下の信頼を獲得して組織を動かす。これが上に立つ者の鉄則です。ペルシャ帝国も同じ。それがなにもされていなかった。変だと思いませんか。たまたま担当の事務方がやるのを忘れてしまったのでしょうか。でもペルシャ帝国の行政組織は、非常にしっかりと規律で動いています。こんな大事なことを忘れるはずはない。では、どうしてか。そのことはまた後で触れることにして、この時の王とハマンのやりとりをまず見ておきます。

2 ハマン

1) モルデカイを柱にかけるために

どのようにしてモルデカイに栄誉を与えたらよいだろうかと王が思案していたちょうどその時、ハマンがやって来ました。前回のところで触れましたが、モルデカイがハマンに頭を下げなかったことに腹を立て、妻や友人たちのアドバイスで二十メートルにも及ぶ柱を立てさせた。この柱にモルデカイをつるすための許可をもらうために、今ハマンはちょうど王のところにやって来た。

2) 心のうちに思った

そんなハマンに、王は尋ねます。6節。「『王が栄誉を与えたいと思う者には、どうしたらよかろう。』ハマンは心のうちに思った。「王が栄誉を与えたいと思う者とは、私以外にだれがいるだろう。』」

モルデカイに対して栄誉を与えようとする王に対して、ハマンはモルデカイを柱につるそうとしている。正反対のことを考えている二人がやりとりをしていく、なんとも驚くような場面です。おもしろい

ことに王はモルデカイという名前を出さず、その代わりに「王が榮譽を与えたい者」という言い方をしたことから、それでハマンはてつきりそれは自分のことに違いないと思ひ込み、精一杯自分の榮譽を誇るために提案した。それがとんだ勘違いだったと分かったときはもう手遅れ。モルデカイを柱につるすつもりだったのが、気がついたら、なんと自分の手でモルデカイが乗った馬を引いて、自分が「王が榮譽を与えたいと思われる人はこのとおりである」叫ぶ羽目になる。なんだか笑ってしまうような展開です。

3) モルデカイがユダヤ民族の一人なら

こうしてハマンは、いっぺんに自分の計画がひっくり返されたことを嘆き悲しみながら家に帰ると、13節で友人たちと妻から「あなたはモルデカイに敗れかけていますが、このモルデカイがユダヤ民族の一人であるなら、あなたはもう彼に勝つことはできません。必ずやあなたは敗れるでしょう」と言われて、ますます落胆します。もう宴会どころではありません。けれども係の者が呼びに来たのでしぶしぶ行くしかありません。

ここで興味深いのは友人たちが、「モルデカイがユダヤ民族の一人なら」と語っているところです。つい一日前はモルデカイを柱にかけなさいと、まるで勝ち誇ったかのように語っていた人たちが、急にモルデカイを恐れていく。そのように変わっていったのは、明らかにハマンから今日の出来事を聞いたことがきっかけです。信仰のない彼らでさえ、これはユダヤ人の信じる神が背後におられると感じ、自分たちには勝ち目は無いと言わざるをえないほど、彼らはおびえているのです。

3 人の罪と神の救い

1) ハマンの計略

さて、ここで先ほどわきに置いておいていた問題に戻ります。なぜモルデカイに対して榮譽が与えられていなかったのか、です。2章21節から3章1節を読みます。そこに手がかりがあるのです。「そのころ、モルデカイが王の門のところに座っていると、入り口を守っていた王の二人の宦官ビグタンとテレシュが怒って、クセルクセス王を手にかけてしようとしていた。このことがモルデカイの知るところとなり、彼はこれを王妃エステルに知らせた。エステルはこれをモルデカイの名で王に告げた。このことが追及され、その事実が明らかになったので、彼ら二人は木にかけられた。このことは王の前で年代記に記録された。これらの出来事の後、

クセルクセス王はアガグ人ハメダタの子ハマンを重んじ、彼を昇進させて、その席を彼とともにいる首長たちのだれよりも上に置いた。」

二つのことに目を留めます。一つ目。ハマンが王の側近に取り立てられたのは、王の暗殺未遂事件が発覚した直後であったこと。ここに注目します。そこからなにがわかるか。暗殺未遂事件のことが、王の前で年代記に記録されました。そのあと、事務方の手でモルデカイに榮譽が与えられるものと王は考えていたのでしょうか。ところが、その年代記を当然のことですがハマンは王の側近として見る事ができた。また、行政組織のトップであるハマンは、モルデカイに榮譽を与える手続きを開始するかどうか、判断する立場にある。そのハマンはモルデカイを殺したいと思うほど憎んでいるのです。どうすると思いますか。自分の手で握りつぶしてしまうのは当然ではないですか。その結果、モルデカイに榮譽が与えられていなかった。おそらくそういうことだったのでしょう。

なぜこのことを詳しく述べたかと言えば、この事実がエステルを助けることになるからです。エステルはこの後、ハマンが王の敵であると告発していくのですが、そのとき彼女の手にはなにも証拠はなかった。けれども調べてくと、王の信頼を裏切るようなハマンの行為が明らかになり、エステルの告発が正しかったことが証明されていく。これも神の備えでした。これが一つ目です。

2) 「ユダヤ人モルデカイ」

二つ目のこと。王の暗殺計画が発覚したのは、エステルが「モルデカイの名で王に告げた」ことがきっかけです。そのときエステルは、ただモルデカイの名前を告げたのではなく、モルデカイはユダヤ人であるとはっきりと告げていた。なぜそうとわかるか。10節。「王の門のところに座っているユダヤ人モルデカイにそのようにしなさい。」王がモルデカイがユダヤ人であることは、そのことが年代記に書かれていたので知った。なぜ書いてあったか。エステルがユダヤ人と証言したからです。その結果、王は「ユダヤ人モルデカイ」と呼ぶ。

それがどんな意味をもつのかと不思議に思うかもしれませんが。しかしこの後、エステルが私の民族を救って欲しいと願い出るときに、重要になっていきます。ペルシャ帝国には多くの民族が住んでいたのですから、その中の特別にユダヤ民族を救ってと言われても、はっきり言えば王にとってはどうでもよいことなのです。ところがつい数時間前、王

は自分の口で「ユダヤ人モルデカイ」と語って、彼に最高の榮譽を与えなさいと命じた。もはや王にとってユダヤ人はどうしてもよい存在ではない。自分を守ってくれたすばらしい民族であると認識している。それなのにハマンはユダヤ人を根絶やしにしようと画策していた。ハマンの罪は、「ユダヤ人モルデカイ」というひとことで、明らかにされていくのです。

あ のとき、エステルがユダヤ人モルデカイと証言していたことが、まさかこのように役立つとは思いませんでした。神の備えとはこのようなものなのです。

3) 神の備え

こうして見てくると、ユダヤ人がハマンの手から救われるために、神が事前に十重二十重と何重にも救いの備えの網を張り巡らせていました。私たちは聖書読んでそうだとわかるのですが、しかしこの時点では、とうのエステルだけがそれを知らされていない。どうなるかと不安と緊張の中で、二日目の宴会の席にすわらなければなりません。

私たちもおなじかもしれません。すでに神の備えがされているのにも関わらず、私たちはわからず、神は何をしておられるのですか、まだですか。どうしてですか。と訴えながら祈らされていくことがしばしばあります。

何もしておられないのではないのです。既に神は完全で、十分な備えをしてくださっている。疑うでしょうか。でも、神がご自分のひとり子をおしまずに、十字架でさばかれ、神のひとり子イエス・キリストが命をお捨てになったのであるなら、これ以上の確かな備えはありません。私たちは十字架を見上げつつ、主の備えを確認して参りたいと願います。